

## 2008 年度 小委員会活動成果報告

(2009 年 2 月 1 日作成)

小委員会名	力学的感性と教育小委員会		主 査 名：新宮清志 就任年月：2007 年 4 月
所属本委員会 (所属運営委員会)	構造委員会 応用力学運営委員会		委員長名：和田 章 主 査 名：竹脇 出
設 置 期 間	2007 年 4 月 ～ 2011 年 3 月		
設 置 目 的 各年度活動計画 (箇条書き)	<p>&lt;設置目的&gt;</p> <p>耐震偽造問題は、職業倫理教育と建築構造教育の根幹を揺るがすものであった。また、一般に流布している耐震安全性の常識は、専門家には考えられないものもある。この問題の要因の一部として、「建築教育における力学的直感の不十分な育成」、「社会と専門家の常識の乖離」が考えられる。教育現場では、座学により構造力学を勉強するものの、建物の崩壊機構をイメージする訓練はほとんど無い。危機イメージの有無は、安全配慮に大きな影響を及ぼす。ここに構造力学直感力涵養の必要性がある。また、設計者と一般社会との構造安全性に関する常識が異なることは、過去より言われている。この乖離を埋めるためには、一般社会における構造安全性の常識を調査することが第 1 ステップとなる。最近は耐震補強ブレースも理解されつつあるが、耐震補強を普及する上では「見た目の悪さ」問題となることが多い。</p> <p>一方で構造工学では、「美しい構造」の一般常識範囲が不明である。持続性のある社会を構築していくためには、「見た目の良さ」も重要と考えられる。「見た目の良さ」を考えた場合、見慣れた「自然風物」を構造形態に取り入れると良いと考えられる。しかし、「自然風物」の構造力学的分析は、あまり行われていない。そこで本小委員会では、「感性・直感」を主テーマとして、以下の 3 点を中心に調査・研究を行うことを目的としている。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1) 感性と力学合理性の追究と教育</li> <li>2) 美しい構造形態の追究</li> <li>3) 自然風物形態の建築構造への応用</li> </ol> <p>&lt;各年度活動計画&gt;</p> <p>初年度： 諸問題の洗い出し、先行調査の検討、および、調査方法の策定。 前小委員会からの継続課題に関するセミナーの実施。</p> <p>2 年度： 委員が分担して調査・分析</p> <p>3 年度： 分析結果を検討、公表予定資料(書籍等)作成開始</p> <p>4 年度： 公表予定資料作成(書籍刊行等)、結果の公開(セミナーか講習会)</p>		
委員構成 (委員名(所属))	<p>委員公募の有無：2008 年度は無し</p> <p>主査：新宮清志(日本大学) 幹事：近藤典夫(日本大学)                      ・山田耕司(豊田工業高等専門学校) 委員：朝川 剛(日建設計)                      ・朝山秀一(東京電機大学) 小嶋英治(ジャパンパイル)・佐藤 淳(佐藤淳構造設計事務所) 高島秀雄(金沢工業大学)                      ・辻 聖晃(京都大学) 堤 和敏(芝浦工業大学)                      ・西谷 章(早稲田大学) 西村 督(金沢工業大学)                      ・諸岡繁洋(東海大学) 安井雅明(大林組)                              ・山崎光悦(金沢大学)</p>		
設置 WG (WG 名：目的)	<p>自然形態の建築構造への応用 WG (主査：山田耕司)：</p> <p>直上小委員会の目的の 1 つである「3) 自然風物形態の建築構造への応用」に特化した活動を行い、成果を挙げ、会員や社会に還元する。実際には、自然風物・形態より着想を得た形状に対して、実構造物を仮定し、力学的分析を試みる。</p>		
2008 年度予算	90,000 円	<p>ホームページ公開の有無：有 委員会 HP アドレス：<a href="http://news-sv.ajj.or.jp/kouzou/s19/kansei.html">http://news-sv.ajj.or.jp/kouzou/s19/kansei.html</a></p>	

項 目	自己評価
委員会開催数	4回（年度内計画を含む）
刊行物 （シンポジウム資料等は 除く）	
講習会	
催し物 （シンポジウム・セミナー・研究会・見学会等）	
大会研究集会	
対外的意見表明・パブリックコメント等	
目標の達成度 （当初の活動計画と得られた成果との関係）	新しい分野であるだけに思うように進展させることが出来なかった。75%程度の達成度と考えられる。
委員会活動の問題点・課題	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 委員会に講師を呼びたいが、地方の方が多く、財政上招待が困難である。</li> <li>2. 調査・研究の焦点が未だ絞り切れていないので、そろそろ的を限定する必要があるようである。</li> </ol>